



『トクシマ・アンツアイガー』

第2号

徳島 1915年4月11日



論説「ティルピッツの戦略」

今日の新聞によると、敵の北海封鎖への対応としてイギリス周辺の海域を戦闘ゾーンにするそうである。「封鎖」とか「戦闘ゾーン」とはどういうことだろう。「封鎖」という概念はよく知られており、海戦の歴史には何度も出てくる。たいてい耳にするのは個々の港の封鎖で、例えば日露戦争のときは旅順港がとても効果的に封鎖されたし、われわれ自身も青島で封鎖とはどのようなものかを経験した。「封鎖」の主たる意味は、その港の海上交通を完全に阻止することである。艦隊の避難港や海の要塞等の封鎖は、ふつうは陸側か海側から取り囲むことでなされる。海の要塞の包囲はもちろん、その場所が海陸両側から完全に封鎖されているときだけうまくいく。なぜなら、さもないければ食料も新たな戦闘器材もそこで調達することはできるからである。

したがって海の要塞の包囲は有効な封鎖なしには考えられないが、確かに包囲を伴わない封鎖もある。もちろん後者の場合には、封鎖の理由はその土地ではなく港の占領にあり、例えばわれわれに対する北海の港の封鎖は、禁制品の海上からの輸入を妨げるためなのである。

封鎖の前提条件は、実際にそれが成し遂げられ成し遂げ得ることである。単なる封鎖宣言は、国際法の規定によれば、その港に接近する船をすべて、封鎖を破る船として扱うには十分ではない。したがってこのような処置を行う前提は実際に封鎖がなされることである。

もちろん、イギリスの海岸全体の封鎖が不可能なことをあらためて強調する必要もあるまい。そのような長い海岸の封鎖自体、われわれの艦隊が敵よりはるかに大きいとしてもできることではないからであり、それはわれわれの力をイギリスの周囲全体に分散することになり、敵が封鎖している船を一方的に攻撃し破壊するチャンスを与えることになるからである。

イギリスの周囲の海、しかも海岸から 30 海里の距離に戦闘ゾーンを宣言するのは、われわれの取ってきた方法とはかなり異なっている。「戦闘

ゾーン」という概念は、海戦では確かに新しい。ここではまだ、この概念をきちんと定義することはできない。この処置の主な狙いは、イギリスへの禁制品の供給を防ぐところにある。イギリス自身がわれわれに対してほとんどすべてのものを禁制品リストに載せてきたので、おそらくイギリスの海岸に近づくどの汽船も禁制品を扱っていることになる。イギリスは、風を巻き起こしたことで嵐を呼んでいるのである。

Uボートを使いこなすわれわれの技術は、敵が思ってもいなかったような報復処置を進める手段を与えてくれた。

2月18日の戦闘ゾーン宣言が施行されてから、すでにかかなりの数のイギリスの商業汽船が沈められた。1ページの地図は、ドーバー海峡やアイリッシュ海や2、3の特に重要な河口がわれわれの作戦の妨げにならないばかりでなく、「U」ボートが島国全体の周りで活動し、しかも大きな成果を挙げていることを示している。そのうえこの2、3日のうちに、スペイン北西端のフィニステル岬でも一隻の汽船が沈められた。

もちろん、わが艦隊の活動部門がますます完全なものになってきたということもある。業績を上げているわれわれのドックが、ますます新しくより良いUボートを進水させるであろうし、この分野での経験もいっそう豊富になり、それに応じて戦果も大きくなっているからである。

われわれの方策の大きな成果は、船と積荷を失うことでイギリスの国民資産がかなり減少したばかりでなく、「海を支配してきた」イギリスの船舶交通がそれを脅かす危険によってひどく制約されてしまった点にある。

いくつもの船会社は船を係留し、それによりいくつかのラインでの運行が止まってしまった。もちろん、運行を続けるとなると輸送料はとて高くなる。このような状況下でも命を賭ける水夫は、いうまでもなくより多くの報酬を求める。船と積荷の保険料はうなぎ昇りである。

船積みの機会が減少し値上がりするにつれてさらに輸入は制限され、外国から輸入しなければならない全商品の値段は釣り上がり、もちろんそれは島国固有の生産物にも跳ね返った。

イギリスはともかく食料品の輸入に依存している。イギリス諸島自体で作っている食料品では、住民の2,3ヶ月の食事しかまかなえないからである。イギリスは、穀物をアメリカとロシアから、肉をアルゼンチンとオーストラリアから、バターなどをデンマークから買っているが、それ以外にも大量に輸入せざるをえないものがたくさんある。軍需物資も大量に北米の合衆国から受け入れている。

したがってわれわれの方策によっていかにイギリスの経済生活全体がひどく動揺し、この戦争への抵抗力がいかに決定的に損なわれているかは歴然としている。ともかく当然だが、われわれ国民の憎しみの大部分が向けられているこの敵を打ち負かすためにはどんな手段でもとらざるをえないのであり、われわれは皆ことに「U」ボートという有効な武器を誇りに思い次のように言うことができる。「この武器をここまで完全なものにした男たち、またそれをこんなにてきぱき扱うことのできる将校や乗組員に幸あらんことを。ご無事で」。

「神よ、イギリスを罰し給え！」

ダーダネルス海峡（2）

ドイツからの最新の電信によると、ダーダネルス要塞の砲撃の際にイギリスの戦艦「ロード・ネルソン」がトルコ軍砲兵隊によって沈められたとのことである。

この損失のほかにもダーダネルス海峡の戦闘で、次の敵国艦船が沈没している。

イギリスの戦艦

「オーシャン」 13,700 トン（1898 年）

「イリジスティブル」 15,240 トン（1898 年）

フランスの戦艦

ブーヴェ

12,000 トン (1896 年)

戦闘以外でもフランスの戦艦「ゴーロワ」11,300 トン (1896 年) とイギリスの巡洋艦「アミシスト」3,050 トン (1903 年) が座礁した。

したがってこの戦場でのこれまでの敵側の損失はかなりだが、戦果はさほどではなかったようである。

ダーダネルス要塞でもボスポラス要塞でも、われわれの海軍砲兵大隊はトルコ軍と協力して戦ってきたようである。したがってこれらの戦果は、われわれの同盟国ばかりでなくわれわれ自身の戦果とも考えることができる。

われわれの復活祭コンサート

とても面白そうなプログラムで、前々からわれわれの期待は高まっていた。しかも予想を上回るものだった。

事実「事情を知らない人」にとっては、われわれのできたてのオーケストラが一晩中通して、しかもとても充実した仕方でそうできるまでになっていたのは驚きだった。

われわれの音楽家に本当に感謝せずにはおられない。彼らの芸術的センス、勤勉さ、ひたむきさにお礼を言いたい。われわれは今や、モーツァルトの室内楽までも楽しめるのだから。日本に捕虜として来たのだから、おそらく誰ひとりこんなことは期待していなかったろう。

プログラム自体については前号で述べた。だから、プログラムの演奏がすばらしいものだったということだけを述べるしかない。ことに驚くほど演奏が軽妙で合奏が正確だった。モーツァルトの四重奏曲がまさにそれである。

チャイコフスキーの曲に贈られた拍手のほとんどは、ソリストのハンゼ

ン氏のお陰である。楽器をきちんと使いこなし柔らかくゆったりした響きをもつその演奏は、もっとたくさんソロパートを聞いてみたいという気にさせた。

コンサートの主催者たちのアイディアでよかったのは、「3つの歌」を再度プログラムに載せたことである。最初の公演では合唱がまだあまり「鍛えられて」いなかった。残念ながら今回も合唱はまだ不十分で、華やかな「3つの歌」はいまだに完全な効果をあげてはいなかった。合唱はオーケストラを手本にすべきであり、練習を積まなければならない。努力なしに成功はないのだ！

最後のステージは行進とダンスで、フルメンバーのオーケストラの大きな響きがとてもそれにマッチしていた。けれども残念ながらここでも、前から気になっていた欠点があらわになった。まさにダンスをし行進する際には、ときにはきちんとリズムを刻むベースが必要なのだがそれが無いのだ。けれどもこの点でも今回は処置が講じられていた。長い間方策を探ってきたがベースを得られなかったのに（このような楽器はここでは80円もするのだ！）、われわれの指揮者はみんなに訴えることにしたのだ。どうだ！この訴えは、驚くような成果を生んだ。寄付名簿が置かれるやいなやすぐに必要な額が集まった。これでまもなくきれいな黒光りするコントラバスが到着し、深く力強いうなりを響かせてくれることだろう。

この集まりの輝かしい成果は、おそらくわれわれのオーケストラがどんなに共感をもって楽しまれているかの証だろう。好意のこもった寄付には全員の名において深く感謝したい！

最後にもう一つふれておきたいのは、今回は舞台がこれまでとは異なり見たところずっときれいに使いやすく作られていたことである。残念ながら明らかに舞台は大きなオーケストラには狭すぎる。こうした障害は、将来いくらか広げることで改善されることだろう。

日本の歴史（1）

日本国は東アジアにあり、3つのほとんど同じくらい反り返っている弧が南西から北東に延びている群島からなっている。最南端の島は台湾で、^{スワトウ} ^{フーチョウ} ほぼ仙頭から福州と同じ緯度である。その近くにはたくさんの小さな島からなる琉球諸島が連なっており、真ん中にもっとも大きくて、日本の歴史にとっても一番大事な島々である九州・四国・本州・蝦夷（北海道）がある。それらに続いて、もっと北のカムチャッカ半島のパラムシル島（幌筈島）につながるより広い島々からできている千島列島がある。そのほか北緯50度までのサハリン島（日本名樺太）とマリアナ諸島の北の小笠原諸島も日本に属し、さらにアジア大陸の遼東半島とかつての韓国も日本の統治下にある。日本を構成している1里（3,927 m）以上の海岸線を持つ島数は488で、国土全体の面積は452,000平方キロメートル、人口は5,200万人である。陸地はとても山が多いという特性を持ち、広い平野や船の入れる長い川がない。農業目的に利用できるのは全国土の5分の1だけで、もちろんこれでは数多くの住民を養うにはまったく不十分である。したがって日本は食糧の大部分を輸入に頼っている。急激に増えている住民に見合うだけの耕地がないことが、アジアやアメリカの近隣地域に国民が大量に移住する理由とされており、また政府がアジア大陸にもっと広い植民地を求めようとしている原因とされている。

けれども日本民族の古い歴史については確かな報告はなく、それを伝えているすべては伝承とみなされている。日本民族のもっとも古い過去を物語っているのは2つの年代記である日本書紀と古事記で、日本人はこれらを信じきってきた。最近の歴史研究によって初めて、これらの年代記があまり当てにならないというはっきりした証拠資料が明らかになった。『記』『紀』¹は8世紀に初めて作られたもので、5世紀以降の文献資料しか利用できなかった。この頃になってようやく日本に文字が伝わってきたからであ

1 それぞれ『古事記』、『日本書紀』

る。それ以前のすべての出来事は口伝によってしか後世に伝えられておらず、それらにはいつも多かれ少なかれ恣意的な歪曲が付きまといっている。これらの年代記は出来事の叙述に関しては史実とは言えないにしても、最も古い過去の生活様式や慣行についてはかなり信用できる姿を提供してくれるのである。

つづく

桜の花

桜の木はわれわれの収容所からも見られるように、豊かな花のすばらしさを生み出し美しい色鮮やかな光景で楽しませてくれる。この日当りのよい早春の日々には、老いも若きも豊かな人も貧しい人も晴れ着を着込み、ご婦人も娘さんもきれいな彩りの帯を身につけ色とりどりの日傘をさし、公園や周りの山々に薄バラ色のかぐわしい花の華やかさをめでながらくり出す。咲き誇る木々の下にはテントや露店がしつらえられ、生き活きたはでな動きの生氣とにぎわいがくり広げられる。わが国でも樹木の花はいつもたくさんの遠出の目標であるが、きちんと身に付いた自然愛を持つ日本人にとっては、桜の季節はより多くの意味をもっている。彼らにとってこの季節は祭りの時であり歓びの時であり、暇があるといつも桜の下で過ごす。彼らは何時間でもたった一本の木を見つめ続けている。

けれどもドイツの桜は日本の桜よりもある点で優れている。われわれは花の鮮やかさを見るともうおいしそうな果物を楽しみにするが、日本人は桜をほとんどいつも観賞植物としてだけ育てている。果物を食べることはまれである。残念なことにわれわれは花見の遠足を企画するわけにはいかない。駐屯地司令部は、周辺からもやって来るたくさんの人々の嫌がらせを恐れているのである。

戦闘日誌（１）

天津の『北中国日刊新聞』は、青島攻囲の戦闘日誌を出している。次に、そこから主なデータを紹介してみたい。

- 7月23日 「カイゼリン・エリーザベト」入港。
- 7月28日 海正面保塁は、戦闘にふさわしいものに改造。
- 7月31日 包囲状態。東アジア海軍分遣隊到着。
- 8月1日 ドイツ、ロシアに宣戦布告。第三海兵大隊第5中隊、周辺地域を初めてパトロール。
- 8月2日 動員。海泊の森伐採。西呉家村近くの亢家荘の森も切り倒された。「ヤグアル」入港。
- 8月3日 ドイツ、フランスに宣戦布告。「イルチス」は、廃艦になった。
- 8月4日 「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」補助巡洋艦に改装。「ティーゲル」「イルティス」「ルックス」の大砲を搭載。まったく別地域から予備役到着。
- 8月5日 「エムデン」「リャザン」を曳航。「リャザン」は「コルモラン」と「ティーゲル」の大砲を付けて、同じく補助巡洋艦に修復。イギリス宣戦布告。
- 8月6日 「エムデン」と「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」出航。
- 8月9日 帝国軍艦「チンタオ」²の乗組員、広東から到着。港の灯りが消される。
海軍東アジア分遣隊、周辺地域に出発。
- 8月10日 膠州海軍砲兵隊第5中隊沙子口に出発。「オッテル」の乗組員到着。

つづく

2 砲艦「ファーターラント」の誤りか — 『青島戦史』26 ページ

シュピーゲル（鏡）

この新聞のために、すぐれた諷刺画家（以前は漫画家と呼ばれていた）を獲得することができました。したがって『トクシマ・アンツアイガー』は、今後「シュピーゲル（鏡）」と題したユーモラスな付録を加えることができます。できれば大喝采を得られますように。第1回「シュピーゲル（鏡）」は、今号に載っています。

チェス・コーナー

（駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン）

第1問の解答

- | | |
|--------------------------------|------------------------|
| 1. Ta6 - a5 Ke6 - d7 | 1. |
| 2. e7 - e8 (D) Kd7 - e,d,c8 | 2. Kd7 x d6 |
| 3. Ta5 - a8 詰み | 3. Te8 - h6 詰み (d7 詰み) |

あるいは

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. Ke6 x d6 | 1. Ke 7 - f6 |
| 2. e7 - e8(T!) Kd6 x c6 | 2. e7 - e8(L!) Kf6 - e6 |
| 3. Te8 - e6 | 3. Th7 - h6 |

第2問の解答

あるいは

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1. Dc3 - g3 Kd1 - d2 | 1. Kd,f,e2 |
| 2. Dg3 - f3 Kd2 - e1 | 2. Kb1 - c1 Ke2 - f1 |
| 3. Kb1 - c2 詰み | 3. Kc1 - d2 詰み |

正解者は課題1・課題2とも、ヴィーザー補充予備役兵とヨーゼフ・ヴェーバー一等砲兵³である。

3 板東俘虜収容所で発行された名簿では二等砲兵

課題3 白：Kh1, Db7, Tf8, Tg7, La6, Sd7, Sf5, Ba4
黒：Ke6, Th4, Ld8, Sc4, Ba5, e7, g5, h2, h6, h7
2手詰め

課題4 白：Kd2, Dh2, Tc4, Th6, Lb8, Lb1, Sc6, Sd7, Bb4
黒：Kd5, Te7, h4, Le8, Sc7, Sf4, Ba6, e6, h3
2手詰め

投 書！

編集委員各位！ あなた方は言うかもしれない。「刊行を始めるとすぐに、すべての新聞の害毒である問い合わせが始まった」と。大きな機関だったら投書欄係りがいて、彼はその時代で一番の苦労人となろう。けれどそちらのような切り詰めた状況ではどうだろう？

私はこうしたため息交じりの愚痴の正しさを認めるだけに、同情で心臓が締め付けられるが、変えるわけにはいかない。自分で選んだ使命は、果たさなければならない。私は国民の触れ役を自任している。頑固でなければならぬのだ。さもなければ、始める前からもうしくじっていることになるから。

国民、民衆、一般大衆は音楽の聴き手としての資格で語るものなのだ。振り返って見よう、ドイツの小学校のことを。もっと上の学校が、どんな状況にあるのかは判らない。われわれの家は、ゲーテの言うように「懐が貧しかった」のだ。けれどもそんなことは、おそろくたいしたことではないだろう。たいていの徳島の聴衆は、小学校しか出ていないのだから。本題に入ろう！われわれの村の学校は、貧しいなりにできるかぎり基礎的な一般教養を授けようと努力している。もちろんそこでも人生の石だらけの厳しさの中で緑の蔓、つまり美術も含まれている。人々は珠玉の文学を手渡してくれ、いくらかでも絵画を理解できるだけのものを与えてくれる。だが音楽は？ドイツ民謡、たったそれだけしかない。それは、文学を寓話

や物語に尽きると考えるのと似たようなものだ！私は学校では一番できの悪い方の一人だったし、卒業後もあらためて勉強するような機会にも恵まれず、音楽作品のことを聞かれたら今でも恥ずかしくて顔を覆ってしまう。最後の学年のある出来事をまだ覚えている。学校にヴァイオリニストが来て演奏したのだが、「牛の心の動き」を徹底的に調べることを趣味にしていた校長は、この機会を捉えて作文のための白い紙を配った。テーマは、「いくつかの音楽作品を聞いての私の感想」だった！結果はどうだったか？31枚の白紙だった。32人目はというと、功名心のためそのような出来の悪い答案は出せなかったので、『偉大な作曲家たち』などからいろいろな部分を組み合わせてでっち上げた。このろくでもない奴が私だった。

要するに、2、3の記事や講演で楽曲理解の基礎を扱っていただけないだろうか。そしてこの分野の特質がこうした取り扱いを許さないのなら、すべての新しく学ぶ作品への簡単な解説がほしいと思う。たとえば初演の直前にでも。

私の提案がすげなく無視されることはないことを期待している。特に私の知るかぎり、おなじみの編集者のくずかごはまだ調達されておらず、私も編集に携わっているのです。

編集部へ

誠恐頓首

ユーリウス

ここで出された提案にはとても共感を覚えます。われわれはこの新聞第1号の「われわれの音楽」という論説ですでに、モーツァルトの四重奏曲について簡単な批評（解説）を加えておきました。今後も喜んでさらに多くの注意を払いたいし、オーケストラに公演前に必要なデータを提供してくれるようお願いしておきます。

編集長

編集委員各位！少し前の娯楽の夕べの際に、われわれのもっとも大事な仲間の一人が作った、とても時流に即した劇が上演され満場の大喝采を浴

びた。多くの人がこの劇を喜んで記憶に止めることと思う。編集者は著者と連絡を取り、この作品の転写を作ってもらえないだろうか。そうすればそれを安く買うことができるのだが。

H. Y.

この戯曲の刊行予定はありません。それを出すための値段を決めるには、購入者がどれくらいいるかあらかじめ判るとありがたいのですが。

編集長

公演の夕べ

たったいま、今夜の公演の夕べのプログラムが届いた。次にそれを載せるが、今回も充実した夜になることだろう。

プログラム

1. ベートーヴェン 賛歌「自然における神の栄光」
男声4部合唱とハンゼン指揮のオーケストラ
2. 詩 H. ハイネ 「ドイツ」(1840年夏執筆)
3. 詩 H. F. ウルバン 「フランス人たち」(メロドラマ風)
4. クルト・キュヒラー スケッチ「ピーター・パンは、どのようにしてイギリス人から逃れたか」
5. 2つの歌「水夫の運命」「野なかのバラ」
男声合唱団「ゲルマニア」
6. 詩 A. モシュコフスキー 「わが家の歓び」
7. メルセル・ザルツァー 「プロイセン人は、どのようにして紀元66年にボヘミアに入り込んだのか」
8. 歌「リュッツォーの魔神の軍勢」
9. ルフ予備役一等砲兵の歌詞・デッサン「われわれの敵」

10. 詩 ゴーレン・フォーク 「ジョン・ブルへの哀れな問い」
11. 音楽作品（楽曲）
-

いったいどうして？

まだ 10 年ここに居座らなければならないとしても、
感覚が鈍磨してもう何も始められなくなっても、
徳島を遠く離れた故郷の村と
同じくらい知ることになっても、
この小さな町の男も娘も街角も庭園も
全部名前を覚えることができて、
今なじみのない奇妙なものと思っている
多くのものを理解するようになって、
ただひとつのことだけは、けっして理解できないだろう。
なぜそうなるのか、ここ日本では
汽船も汽車も
いつでもひどく狂ったように汽笛を鳴らす
こん畜生
このきりのない汽笛め

広 告！

料理の技術を身につけたいきれいで若い娘さん、詳しくは収容所の調理
場まで。

投書・チェス解答の編集締め切りは、木曜の夜 8 時です。



シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アン
ツアイガー』
ユーモア付録

ハイン・ラメルスの戦争体験



ハイン・ラメルスは農夫で、故郷は
エルベ川沿いのハンブルクである。

40代半ばで娘と息子がおり、
牛乳を商っていて、キュンメル酒を飲んでいる。



そして朝4時に彼は、連絡汽船で
牛乳を街の人たちのもとへ運んで行く。
このことは、もう10年来まったくうまくいっていた。
そこに突然支障が生じた。
というのも戦争だという叫びが国中に響き渡り、
男たちはすぐに召集されたからである。
まだ元気で丈夫なハイン・ラメルスも、
たくましい前線兵士へと姿を変える。



かくして彼はいち早く信頼できる

国民兵とみなされ、

まもなく戦場の最前線向きとされるが、

ハインは、それをとても嬉しく思う

彼は至る所でうっぷんを

晴らし、

フランス人を殴ったり

叩いたりしたが、

やせたイギリス人を

へこませる機会

はなかなかやってこなかった。





勇敢な英雄たちはたいいてい
目立たない場所にいたので、
戦闘行為の訓練をする代わりに、
サッカーを楽しんでいた。

ある晩少尉がハイン・ラメルスに
来るように言うのでついて行く。
これから敵が夜中に突撃して来るか
どうかを調べよう



そしてうまくいったら、
捕まえてこられる。

すぐに森に着き、少尉は止まれ！

と命じたる。

二人連れでは目立つので、
別々に進んで行く。

ハイン・ラメルスは、
敵の姿が見えないか
どうか
周りを窺う。





苦勞が実って、
木に小銃が立てかけてあるのを見つける。
戦闘行動へのはやる気持ちの余りに、
心臓が高鳴る。



思い切って飛び上り、
哀れなうすのろの敵の髪の毛をつかむ。
敵はそのときこの術策で、
寝込みを襲われたのだ。

こんなことが愉快でないことは
誰にでも判ることだ。
サッカーをするのは疲れる、と
こやつは不安な気分で考える

とても暗い夜だったので、
ハイン・ラメルスはその場にとどまり、
そいつがどこの国の人間かと
あれこれ考える。



つまり空の青さが隠れて
しまう夜には、
すべての猫が灰色になる。



日が射してきて初めて
どんな獲物を得たのか
判るのだ。

こいつは女を真似たやつ
ではないか、
房の付いた派手な
スカート⁴をはいて。
こんなもの、国じゃ女どもが
身につけている。

4 イギリス軍のスコットランド兵はスカートに似た民族衣装のキルトを身につけている。

そこでハイン・ラメルスは、そいつを丁重に
中隊に連れていった。

そして彼は、行き着いた至る所で
笑いを引き起こした。

彼はそいつからスカートをはぎとって、
戦時小包みにして家に送った。

家では一番若い下女のトリーネが、
とりわけ日曜に喜んで身に着けている。



ところでこの話の教訓は、
戦時には女を信用するなということだ。
女物のスカートやその他の品物を身につけていても
明るいところで見れば、それはイギリス野郎だ。
この代物を大事にすることは、
事実何の報酬にもならない。
そういうものは根こそぎ放り捨てねばならない。
そうすれば目標に辿りつける。